全酪連会報 1

2025 JAN No.712

ZENRAKUREN

新年のご挨拶
代表理事会長 隈部 洋
農林水産省畜産局長 松本 平

酪農とのかけはし／らくのうマザーズ 阿蘇ミルク牧場

令和6年度 全酪連・全国酪農協会会員職員研修会

酪農業に対する理解醸成活動報告2

日本酪農見て歩紀／株式会社 朝霧高原城田牧場（静岡県富士宮市）

酪農トピックス／東京ガス料理教室 たっぷり牛乳レシピで牛乳消費！（総務部）ほか

（一社）全国酪農協会の酪農共済制度のご紹介 第3回

LINE公式アカウントができました！登録お願いします！

酪農青年女性会議
@642bpcwk

全国酪農業協同組合連合会

新年のご挨拶

全国酪農業協同組合連合会　代表理事会長
隈部　洋

新年明けましておめでとうございます。

全国の酪農生産者・会員の皆様及び関係者の皆様におかれましては、良き新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

日頃より、弊会事業に特段のご支援ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

令和7年の年頭に当たりまして、一言ご挨拶申し上げます。

昨年は、新年早々に能登半島にて地震が発生し、その後、台風10号による暴風雨や被災地である能登半島での豪雨により、飼料及び生乳流通経路の寸断、断水・停電による生乳の廃棄など大きな被害が発生しました。改めて被害に遭われた酪農・乳業関係者に心からお見舞いを申し上げます。また今年こそは、災害の無い平穏な一年であってほしいものです。

さて昨年の日本の酪農情勢としましては、乳価は上昇したものの、為替の円安傾向や地政学的リスクを背景とした生産資材・燃料価格の高止まり、副産物価格の下落は酪農経営を圧迫し、酪農家戸数の減少に歯止めがかからない状況となりました。

一方で、厳しい酪農環境下ではありましたが（一社）全酪アカデミーにおいては一昨年誕生した2組の新規就農者に続き、1組の新規就農者が昨年11月より福岡県で生乳出荷を開

始しました。今後も賛助会員と共に、酪農生産基盤の維持に貢献してまいります。また、外部からの新規就農者は永く酪農業を営んでいる酪農家と違った見方で酪農を捉えていることが多く、周辺の酪農家へも良い刺激を与え、地域活性化の源となってくれるのではないかと思います。酪農経営が順調に進むよう引き続きサポートをしてまいります。

このような中、6月に25年ぶりに食料・農業・農村基本法が改正され、基本理念に「食料の安定供給の確保」が掲げられました。将来、海外からの食料や原料等の輸入がままならなくなることが考えられる中、国内の生乳生産基盤を維持することが重要になってくると思います。

そこで、酪農及び肉用牛生産の近代化を図るための基本方針の見直しにおける2035年の生乳生産目標については、780万tを維持できないかと考えています。輸入乳製品の一部を流動的に国産に置き換え、安定的に生乳を生産できる体制にし、生産抑制されることなく「思い通りに搾乳できる」環境を整えることで酪農家のモチベーションを高められればと思います。

適正な価格形成については、最終的に消費者に納得して買っていただく価格でなければますます需要が減少する可能性があり、食料安全保障からの視点とあわせて、消費者への理解醸成が欠かせないと考えます。これまで全国酪農青年女性会議と共に全国で牛乳・乳製品の消費拡大や乳価への理解醸成活動を行ってきましたが、あわせて日本で酪農生産を継続する意義も消費者へ伝えていきたいと思います。

また安心して酪農を営むことができる環境を整えるために、酪農所得を支えられるようなセーフティネットの構築も必要であると思います。食料安全保障の観点と持続可能な酪農経営の構築に向け、今後とも、日本酪農政治連盟や他団体と協調しつつ、酪農対策の一層の充実について政府・与野党に強く要請してまいります。

こうした中、私ども全酪連は、本年4月からは第十三次中期事業計画の中間の年がスタートいたします。本会の事業環境も非常に厳しい状況となっております。収支改善・安定化に向け引き続き「販売事業の強化」「業務効率化」を柱として、「NEXT STAGE 全酪」を合言葉に次の段階へのステップアップを目指し、会員の皆様のご協力と行政・関係団体のご指導ご支援を賜りながら、持続的な酪農生産基盤の構築に尽力する所存であります。

最後になりますが、全国の酪農生産者・会員役職員の皆様のご健勝とご発展をご祈念申し上げまして、新年のご挨拶とさせていただきます。

令和7年 年頭所感

農林水産省畜産局長
松本　平

明けましておめでとうございます。

令和7年を迎えるにあたり、一言、御挨拶を申し上げます。

皆様におかれましては、平素から酪農乳業行政の推進に御理解と御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年の国際情勢の不安定化や円安の進行等は、我が国の国民生活には物価の高騰、とりわけ酪農業には飼料、燃料、肥料などの各種生産資材の高騰という形で、影響を与えてきたものと認識しております。一方、外国人観光客数は過去最高を記録し、インバウンド需要の増加など、消費面では明るい動きも見えております。

酪農乳業界では、令和4年から4回に渡り、飲用向け、乳製品向け乳価の引上げが実現されてきました。こうした中、生乳需給は、ヨーグルト需要の低迷や製品価格の値上げの影響もあり、脱脂粉乳を中心に緩和傾向で推移しています。令和6年10月末時点では、これまでの在庫低減対策の効果もあって、脱脂粉乳の在庫は適正水準となっていますが、何ら対策を講じなければ在庫が積み上がってしまう状況は変わっておらず、生乳需給と酪農経営改善の足かせとなっており、脱脂粉乳在庫対応や、今後の国内人口動向を踏まえた需要拡大対応などが乳業・酪農の持続的な発展によって、引き続き課題となっています。

こうした状況を踏まえ、農林

水産省として、令和6年度補正予算において、需給改善のための支援として、脱脂粉乳在庫対策を継続するとともに、国産チーズの競争力強化対策や輸出拡大に向けた対策を措置したところです。

また、牛乳乳製品の消費拡大については、SNS等を通じた消費者に対する理解醸成や、主要空港での牛乳の試飲、牛乳の割引販売などの訪日外国人観光客や子ども食堂等への消費拡大対策を行うとともに、官民の幅広いメンバーが連携する「牛乳でスマイルプロジェクト」を立ち上げ、メンバー同士のコラボレーションによるキャンペーンや商品開発の促進等の取組を進めております。

引き続き、農林水産省においても業界の皆様とともにこれらの取組を適切に実施し、今後の需要の拡大や需給の安定に努めてまいります。

さらに、国産牛乳乳製品の需要の拡大という点において、少子高齢化等により国内の食のマーケットの縮小が見込まれる中、成長が期待される海外市場を積極的に開拓していくことは極めて重要と考えております。

政府においては、農林水産物・食品について輸出額目標を設定しており、牛乳乳製品については重点品目に位置づけております。これまで牛乳乳製品の輸出額は堅調に増加傾向で推移し、令和4年、5年と2年連続で300億円を超えたところです。農林水産省では引き続き輸出目標の達成に向け、オールジャパンでのプロモーション等の取組や、生産者・乳業メーカー・輸出事業者が連携した「コンソーシアム」による一貫した輸出促進の支援、輸出先国が求める水準を満たす乳業施設の整備への支援等を通じ、更なる輸出拡大を推進してまいります。

今後、持続可能な酪農を実現する観点からは、輸入飼料価格などの外部要因に影響をされない足腰の強い酪農への転換を更に進めていく必要があります。

農林水産省としては、酪農の省力化やスマート化に加え、国産飼料の生産・利用の拡大を一層進め、飼料生産基盤に立脚した酪農経営を推進してまいります。

また昨年、「食料・農業・農村基本法」が改正され、食料安全保障が基本理念の柱と位置付けられるなどしたところです。現在は新たな食料・農業・農村基本計画の策定に併せて、我が国酪農乳業の中長期的な計画を定める「酪農及び肉用牛生産の近代化を図るための基本方針」の見直しを年度内めどに進めております。

この数年間で顕在化した課題を整理し、酪農・乳業界をはじめとする関係者の皆様からご意見をお伺いしながら検討を進めており、令和7年度からは、業界全体で中長期的な視点をもったうえで、これら課題に一つずつ乗り越えて、持続的な酪農・乳業界を構築していく初年度となるのではないかと考えております。

皆様におかれましては、昨年にも増して、酪農乳業行政への格別の御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げますとともに、皆様方の一層の御健勝と御活躍を祈念いたしまして、新年の御挨拶とさせていただきます。

酪農とのかけはし

第53回 らくのうマザーズ 阿蘇ミルク牧場

今回ご紹介するのは、西日本一の生乳生産量を誇る熊本県にあり、昨年4月に創立70周年を迎えた熊本県酪農業協同組合連合会（らくのうマザーズ）の100％出資子会社である㈱マザーズファームが運営している「らくのうマザーズ 阿蘇ミルク牧場」（以下、「阿蘇ミルク牧場」）です。宮本さん・肱岡さん・江藤さんの3名にお話を伺いました。

酪農と乳業の理解醸成施設

阿蘇ミルク牧場は、雄大な阿蘇山を取り囲む外輪山の標高430mに位置し、総面積33ha（東京ドーム約7個分）の広大な敷地からは、天気の良い日は有明海を超えて長崎県雲仙普賢岳が眺望できます。

熊本県酪農の象徴として、また多くの生活者に酪農業の魅力や大切さを伝え、消費者との交流を通して酪農・乳業への理解を深める施設として、2000年4月に「阿蘇らくのうパーク」が誕生しました。当時は様々なイベントを企画し集客増を図っていました。しかし、お客様が真に何を求めているのかを考慮し、2003年4月に酪農に特化した酪農体験型施設「らくのうマザーズ 阿蘇ミルク牧場」として生まれ変わり今にいたります。昨年度までの累計来場者数は600万人を超え、多くの方々に愛され今年で25周年を迎えます。

▲（左）江藤さん（真ん中）肱岡さん（右）宮本さん

生産・加工・販売まで一貫体制で

牧場では世界5大乳牛のホルスタイン・ガンジー・ジャージー・エアシャー・ブラウンスイスを飼養しています。生産した生乳はブレンドして、全て牧場内の工場で牛乳・チーズ・バターなどの乳製品に加工されます。生産した生乳を全て自社製品にするため、「一滴たりともムダにしたくない！」「がんばって販売するんだ！」とのことで、牧場内で生産・加工・

体験する・たべる・買う・まなぶ・あそぶが全部できる！

宮本（みやもと） 英明（ひであき）さん
代表取締役　62歳
1989年　熊本県酪連入会
2024年　㈱マザーズファーム 代表取締役就任
「自分のことよりぜひ２人を紹介してください。」という部下想いな一面が印象的でした。

肱岡（ひじおか） 環（たまき）さん
物販グループマネージャー　58歳
2009年　他業種を経て入社
現在は乳製品の営業・物産展への出展・ネット販売などを担当。
なんと娘さんの誕生日が阿蘇ミルク牧場の創立日と同じだそうです。なにか運命を感じますね。

江藤（えとう） しのぶさん
営業・体験グループマネージャー　48歳
2000年　阿蘇ミルク牧場オープン時にレストランのアルバイトとして入社
現在は社員として企画・営業・ミルク牧場通信の編集などを担当。
様々な部署を経験され視野が広がり今の自分に活かされているそうです。

販売まで一貫して行っているからこその愛情を感じました。工場で製造した乳製品は、物産館「ミルク市場」やオンラインストアでもお買い求めいただけますので、ぜひご賞味ください。

世界で評価されたチーズ

取材ではお話を伺えませんでしたが、支配人兼チーズ職人の清水さんが、牧場の設立からチーズづくりに携わっています。2019年10月にイタリアで開催された「World Cheese Awards 2019」で「あそ野（ゴーダチーズタイプ）」がゴールドメダルを受賞し、原料となる生乳の品質、チーズづくりへの情熱や技術の高さが世界で評価されました。

筆者も取材後にちゃっかりとお土産に購入させてもらいました。牧場の牛乳や乳製品などを使った、安心安全で美味しいお料理を牧場内のレストランでいただけるので、次はぜひ食べてみたい！

体験する・まなぶ・あそぶ

牛や酪農を見て触れて体験して、命の温かさ、職・食・触を知ってもらうため、牛の乳しぼり体験を毎日開催しています。また、乳牛のほかに、犬・ミニ豚・馬・羊・ヤギ・鶏・カモ・うさぎ・マウスなど、多くの動物がお客様を待っています。温かさや感触、表情を間近で感じるふれあい体験、作る楽しさや食と命について学ぶことができるチーズ・バターづくりなどの手作り体験なども実施しており、小学生だけではなく、中・高生の食育の場や修学旅行としての団体利用も多いそうです。様々な体験をとおして、子供から大人まで笑顔で楽しみながら学んでいる姿が目に浮かびます。

▲ らくのうマザーズ 阿蘇ミルク牧場の入り口

▲ あそ野（ゴーダチーズタイプ）、3種（プレーン・スモーク・スパイス）

苦難を乗り越えて

今年で25周年を迎える阿蘇ミルク牧場ですが、これまで数多くの苦難があったそうです。2010年の口蹄疫発生、2016年の熊本地震発生は「本当に苦しかった。」と当時のことを振り返ってくれました。

口蹄疫が発生した際は、臨時休業を余儀なくされ、らくのう体験エリアをはじめとした動物エリアは封鎖し、スタッフ以外の立ち入りを制限しました。その後、動物エリア以外で入場料を無料にして営業を再開しましたが、お客様はなかなか、回復しなかったといいます。

「物産館やレストランも大事だが、それだけでは成り立たない。ゆっくりと時間が流れる自然の中で動物とふれあう体験も大事で、どれが欠けてもお客様が真に求める阿蘇ミルク牧場は成立しないことを思い知らされた。」と苦境から学んだことを振り返ってくれました。

また、熊本地震の際は、「阿蘇ミルク牧場は大きな被害はなかったものの、それでもガラスの飛散や、搾った生乳の廃棄などの被害がありました。大きな被害のあった酪農家が多く、主要道路は寸断され近隣は緊急車両の往来も多くなり、牧場を開園して良いものか本当に悩んだ。」といいます。そして、直近では記憶に新しい新型コロナウイルスの感染拡大もありました。

そのような苦難が訪れるたびに、スタッフが協力して様々な知恵を出し合って乗り越えてきました。「職場の雰囲気がとても良く、ちょっとしたことでも相談でき、部門を超えて様々なアイデアが活発に出る職場環境です。」とのこと。普段から阿蘇の自然に囲まれて動物やお客様とふれあうことで、豊かな発想や思いやりの心が育まれるのだろうと感じます。

また、「牛舎のスタッフが夜中に駆け付けたりするのを日々身近で見

ており、酪農家の苦労を肌身で感じることができる職場です。」ともおっしゃっていました。乳牛の飼養、乳製品の製造・販売など、部門を超えた情報共有が密に行われている証だと感じます。

仕事のやりがい、想い

●宮本さん

創立25年目となり、子供の頃に阿蘇ミルク牧場に来られたお客様が、親になりお子様を連れて来られることも多々あります。地元に根付き世代を超えて愛していただいていることが本当に嬉しいかぎりです。スタッフ全員が牧場入口に掲げられている「創立の原点」を胸に刻み大切にしています。実績が苦しい折には、厳しい声をいただくこともあります。しかし、まさに酪農家と消費者のかけはしであるこの牧場の存在意義を、皆さまにもご理解いただけるよう努めてまいります。

▲ 牧場で待っているよ♪

●肱岡さん

昔、熊本に住んでいた時に乳製品の手作り体験をされたお客様が、名古屋の物産展でチーズを購入しに来てくれたことがありました。そして、そのお客様がおいしかったとわざわざ牧場を訪れてくれました。チーズを食べていただいたお客様から、自分が経営しているレストランで使用したいというお声をいただくこともあります。お客様から「おいしい」と言ってもらえることが嬉しいし、この仕事をやっていて良かったと感じます。

▲ チーズづくり体験の様子

●江藤さん

阿蘇ミルク牧場は、お客様との距離が非常に近い牧場です。お客様とスタッフという関係ではありますが、家族のような接客を目指しています。過去に自分のおごりからお客様にお叱りをいただいたこともありましたが、同僚や後輩に包み隠さず伝え教訓としています。動物たちとふれあい、おいしいものを食べ、阿蘇の自然と牧歌的な風景に癒され、ほっと一息つけるような牧場でありたいです。ファンになってもらい、お手紙をいただくことが何よりの励みです。

あとがき

宮本さん・肱岡さん・江藤さん、この度は取材を快く引き受けてくださり、ありがとうございました。皆さんが仕事に誇りを持ち、一生懸命それぞれの仕事に励んでいる様子が伝わってきました。これからも酪農の魅力を消費者に発信していってください。阿蘇ミルク牧場のさらなる発展を心より願っています。

（B・Y）

全国の酪農家に一言！

人と牛の付き合いは非常に長く、有史以前からだと言われています。これだけ長く続いてきた人と牛の関係をこれからも長く続けていかなければと感じます。酪農家の皆さまには、これからも仕事に誇りを持ってがんばっていただきたいです。先代の方々に感謝し、これから継いでくれる次世代の方々にも感謝しながら、酪農の魅力を伝え繋げていってもらいたいです。

●ホームページ
➡ https://www.aso-milk.jp/
阿蘇ミルク牧場

●オンラインストア
➡ http://shop.aso-milk.jp/

●Instagram
@ASO.MILK.BOKUJYOU

令和６年度

全酪連・全国酪農協会 会員職員研修会

令和６年11月18日㈪に、全酪連・全国酪農協会　会員職員研修会を開催いたしました。今回から、（一社）全国酪農協会の会員にも広く情報を提供できるよう、同協会と共催といたしました。

今回の研修会は、昨今、各地で被害が見られる野生鳥獣問題と、今年、四半世紀を経て初めて改正された食料・農業・農村基本法のポイントの２題を取り上げました。

本号では、静岡県立農林環境専門職大学名誉教授、（一社）全日本鹿協会副理事長・事務局長である小林信一氏による「酪農と野生鳥獣問題」を、抜粋して掲載いたします。

酪農と野生鳥獣問題

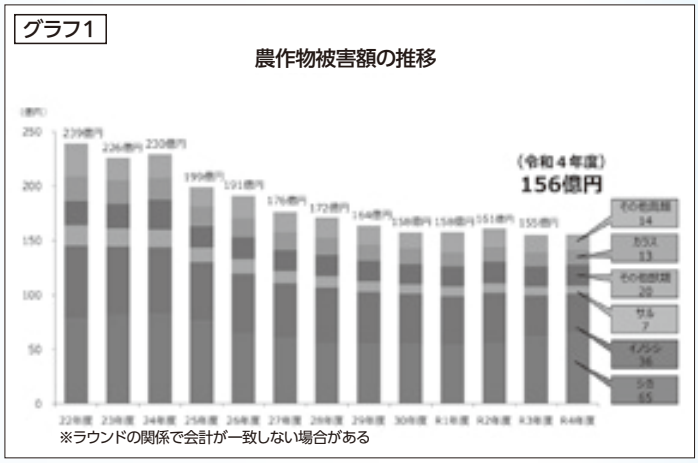
静岡県立農林環境専門職大学名誉教授
（一社）全日本鹿協会副理事長・事務局長　**小林信一**氏

酪農、特に、自給飼料を作っている酪農家にとって、今、野生鳥獣問題というのは、非常に大きな問題であるということは現場にいらっしゃる方は痛感されていることかと思います。

野生鳥獣被害の実態

農村部を中心に、野生鳥獣による被害は非常に深刻な問題となってきています。被害の内容は多様ですが、主に、①農産物被害（酪農では牧草やデントコーンの被害）②森林被害（それに伴う山崩れなどによる災害等）③希少植物の食害などの生態系破壊④市街地に出没する野生動物との交通事故や人身被害などが挙げられるでしょう。

国の調査によりますと、農産物被害額は、令和４年度で156億円、その中で一番多いのが鹿による被害で65億円程と約４割を占めています。（**グラフ1**）平成22年度の239億円から比べると右肩下がりで減っていますが、「収穫期に被害に遭った。だから翌年は作付けしない」という耕作放棄もあるのではないかと考えられます。作付けしなければ被害はゼロになります。全部とは言いませんが、そのような形で被害が減少しているとも考えられます。



森林被害も５，０００haと言われていますが、下草が被害にあい、樹木の根がむき出しとなり、また木の皮も剥がされ葉も食され、その結果、樹木は枯れてしまいます。林業家が何十年もかけて育てた樹木は一晩でダメになってしまい、そして、植生衰退地への集中豪雨などにより土壌侵食や土砂災害が広がってくるという構図です。鹿による被害は都市部への災害にも繋がっているような状況です。

また、最近ニュースでよくみるのは、都市部に進出する野生動物です。北海道では、鹿由来の交通事故が２０２３年度は５千件以上あり、死亡事故も発生しています。

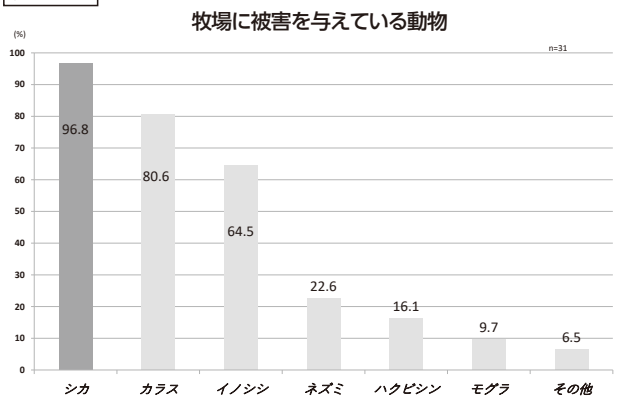
酪農への被害

我々が２０１１年に静岡県富士宮市の朝霧高原の酪農家に対して行った調査では、31戸のうちほぼ１００％の農場が鹿による何らかの被害を受けていました。（グラフ２、グラフ３）その内容は牧草の食害に遭った方が９割で、作付けする自給飼料畑すべてが食害に遭ったと答えた方が２割、畑の50％以上で被害に遭ったと答えた農場は半数に上りました。また、牧草畑の中に高さ１ｍの柵で囲いを作り、その食害を調べました。柵の中の牧草は食べられないようにして、その外側は鹿が自由に食べられるような状況を作りました。柵の中と外の収獲量の違いを見るという調査です。枠の外の牧草のほとんどが鹿に食べられてしまった箇所もありましたが、２０１１年は平均で48％の被害が、翌年２０１２年では60％にまで増加していました。

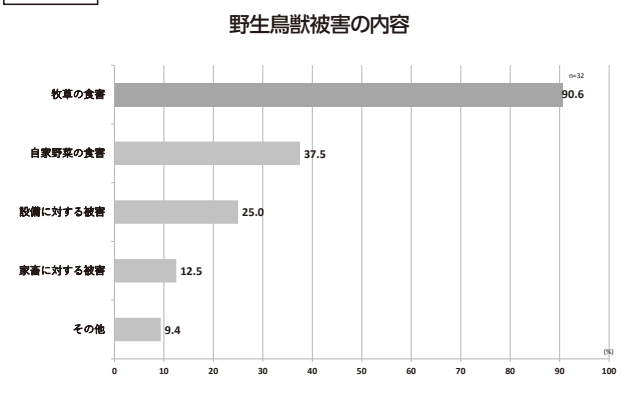
また、２０２１年にも富士宮地区で同様の調査を行いました。最近でも約３割の牧草が鹿に食べられており、飼料価格高騰の中で酪農家への経済的負担は重いものがあります。さらにセンサーカメラを設置し、鹿が出没する時間帯の調査も行いました。「鹿は夜行性じゃないか」といわれたりもしますが、そうではありません。野生鳥獣は夜明けと夕暮れに出やすいといわれていますが、人間の活動で変わってきます。今回の調査では１日中畑に出没している状況も捉えられました。

全国での鳥獣被害面積は３４，０００ha（令和４年）といわれています。そのうち57％が飼料作物畑です。畜産、特に酪農家が被害に遭われているということです。飼料作物畑の９割以上が鹿による被害といわれています。（グラフ４）

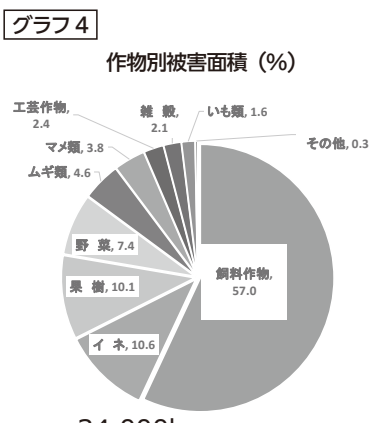
グラフ２



グラフ３



グラフ４



野生鳥獣急増の原因と政策対応

ここ20～30年で鹿は約10倍まで増加しています。その大きな理由は、農産物を餌として食べるようになったからではないかと考えています。戦後復興のため広葉樹林を伐採して木材用にスギ、ヒノキなどの針葉樹を植林したため、鹿や猪、熊の大好物である広葉樹のドングリが減ったこと、またその後の木材価格の暴落で針葉樹林の間伐など手入れが十分に行われず、下草が少なくなるなど生息地の餌が少なくなったことで森林から鹿などが押し出され、一方、餌（農産物）が豊富な集落周辺に引き寄せられたということです。集落の人口は減少し、増えた耕作放棄地に潜んで集落周辺に出没することが容易になっています。ここ数十年で農産物の輸入自由化が進み、農産物価格の低下などにより農業所得が減少するのに伴い、農村の過疎化・高齢化に拍車がかかっていることが、野生鳥獣が集落に出没し人間との緊張関係が高まっている背景にあると考えます。このように考えると、農山村の衰退という根本的な問題を解決しない限り、野生鳥獣問題は解決できないのではないかと考えます。

国の政策として、戦後から90年代半ばまでは保護政策でしたが、増頭による農林被害が増加し、90年代半ばからは過剰対策に転じ、99年には鳥獣保護法が改正され、増えすぎた特定鳥獣を管理することも法律に位置付けられました。２０１３年には

「10年後には鹿・猪の頭数を半減する」という目標がたてられましたがその目標は達成されず、その後も生息個体数は目標通りには減少できていないのが現状です。2010年後半からは野生鳥獣の肉などを資源として利活用しようという指針が出されました。

現在、国は①捕獲して処分する個体群管理②柵などを設けた侵入防止対策③刈り払いや放任果樹の伐採などによる生息環境管理の三つを柱としています。こうした対策も重要ですが、鹿や猪が棲める森林を作ることが一番の生息環境管理ではないかと考えます。森林がかなり荒れている現在、人と動物の棲み分けができるような、鹿や猪が棲みやすい環境を作ることが一番のポイントではないかと考えます。

令和4年で捕獲された鹿の頭数（狩猟も含む）は72万頭。その内、57万頭は国や市町村が助成金を支払ってハンターに依頼して駆除しています。ハンターの減少や高齢化が問題となっており、今後も現在のような個体数調整を続けられるか危惧されています。罠の免許を持っている人は女性を含め少しずつ増えていますが、実際に罠猟をしている人は増えていないのが現状です。さらに猟銃免許を持っている方が減っていることが問題視されています。担い手をいかに育成するかというのも課題となっています。

農林水産省は、鳥獣被害防止特措法に基づき市町村に鳥獣被害対策実施隊の設立とその活動を支援しています。先ほどの国の3つの方針を実施する隊を行政がつくり、支援するものです。現在ほとんどの市町村に組織され、非常勤ですが公務員として遇しています。今後は鳥獣対策の専門家を育成し、市町村などに常勤の職員として配置するなど、猟友会任せではなく、行政がしっかりと担っていくことが重要だと考えています。

資源としての活用

駆除した後の利活用も重要です。ジビエとして鹿肉や、皮革などに利用されていますが、ジビエへの利用割合はあまり多くなく、2023年のデータでは鹿で約17％、猪で約8％の利用にとどまり、ペットフードや皮革の利用もありますが金額にすれば僅かです。現在は中国などから輸入している幼角から作られる鹿茸（ろくじょう、漢方薬）の国産化も現在試行段階にあります。

今後の方向としては将来的には養鹿（鹿を家畜として飼う）して衛生的に処理するという方法もあると考えます。世界では、養鹿をしている国（中国、台湾、ニュージーランド、欧州等）もあります。日本でも過去養鹿をしていましたが、需要の拡大、流通経路の整備、生産・販売に係る経費などを解決できず、うまくいかなかったようです。現在は野生鹿の「一時養鹿」が北海道を中心に実施されています。ジビエ事業が定着すれば、再度養鹿が必要になるのではないかと考え、海外も含めた養鹿の研究も行っています。

今般、食料・農業・農村基本法が改正され、第48条に鳥獣害の対策が新設されました。これは画期的なことだと考えます。国も野生鳥獣問題は大きな農業・農村問題だと認識しているという事ですので、是非皆さんも野生鳥獣問題に関心を持っていただければと思います。

チェコの養鹿場にて

■一般社団法人全日本鹿協会

【目的】

鹿の保護管理及び資源としての持続的活用を図るため、会員活動の支援や会員相互の連携強化等に努め、鹿と人間の共生を目指すことを目的としています

【活動内容】

①鹿及び鹿の資源的活用に関する調査研究、情報の収集及び提供
②鹿の棲める森づくり活動
③鹿に関するシンポジウム、講演会、講習会及び海外研修の開催
④鹿による地域活性化のための関係団体との連携活動
⑤鹿に関する国際交流
⑥機関誌等の刊行

⬇https://nihon-shika.info/

なお、同日行いました農林水産省による『食料・農業・農村基本法改正』の講演資料につきましては、

⬇https://www.maff.go.jp/tokai/seisaku/kihon/attach/pdf/20240717-1.pdf

を参照ください。

酪農業に対する理解醸成活動報告2

先月号に引き続き、全国各地で展開されている理解醸成活動のご報告をいたします。
ご協力いただいている関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

札幌支所

●酪農業に関する理解醸成活動
会場：北海道内こども園
開催日：11月19日㈫
参加者：北海道酪農青年女性会議 他

名古屋支所

●刈谷市内小学校ニコ（子牛の名前）の卒業式
会場：刈谷市内小学校（愛知県刈谷市）
開催日：11月19日㈫
参加者：愛知県酪農農業協同組合 他

●JA農協祭り
会場：JA西三河事務センター（愛知県西尾市）
開催日：11月22日㈮～24日㈰
参加者：愛知県酪農農業協同組合 他

●岐阜大学応用生物学部動物栄養学研究室（八代田真人）への出前講座
会場：岐阜大学（岐阜県岐阜市）
開催日：11月26日㈫
参加者：愛知県酪農農業協同組合 他

●食テクノロジー専門学校プロジェクト審査会
会場：食テクノロジー専門学校(愛知県名古屋市)
開催日：12月7日㈯
参加者：愛知県酪農農業協同組合 他

●酪農業に関する理解醸成活動
会場：三重県文化会館（三重県津市）
開催日：11月29日㈮
参加者：三重県酪農農業協同組合 他

●国吉収穫祭
会場：里山交流センター（富山県高岡市）
開催日：11月23日(土・祝)
参加者：高岡市農業協同組合 他

●令和６年度第21回農大祭＆西山農業祭
会場：三重県農業大学校
開催日：12月７日㈯
参加者：三重県農業大学校、三重県農業研究所 他

大阪支所

●第45回兵庫県民農林漁業祭
会場：千畳芝（兵庫県明石市）
開催日：10月19日㈯～20日㈰
参加者：兵庫県酪農青年部会 他

●ふれあいファーム
会場：大洲農業高等学校（愛媛県大洲市）
開催日：11月９日㈯
参加者：愛媛県酪農経営者協議会 他

●おかやまミルクフェア2024
会場：北長瀬未来ふれあい総合公園イベント広場（岡山県岡山市）
開催日：11月９日㈯
参加者：おかやま酪農業協同組合女性部 他

●教育ファーム
「わくわくモーモースクール」
会場：板東照之牧場
（徳島県板野郡上板町）
開催日：11月26日㈫・29日㈮
参加者：徳島県酪農農業協同組合
他

福岡支所

●日本発祥地祭り
会場：高原町総合運動公園
（宮崎県西諸県郡高原町）
開催日：10月20日㈰
参加者：JAこばやし地区
酪農部会 他

●ふれあいフェスタ
会場：小林地域家畜市場
開催日：11月２日㈯～３日㈰
参加者：JAこばやし地区
酪農部会 他

●宮崎県農業協同組合
大東地区本部農業祭
会場：宮崎県農業協同組合
大東地区本部
（宮崎県串間市）
開催日：12月１日㈰
参加者：串間酪農組合婦人部
他

●山鹿だ「わっしょい元気祭り」
会場：JA鹿本山鹿支所駐車場
（熊本県山鹿市）
開催日：11月24日㈰
参加者：鹿本農業協同組合 他

日本酪農 見て歩紀 No.379

株式会社 朝霧高原城田牧場
静岡県富士宮市

日本酪農の将来のために、牛のために、消費者のために

▲ 城田亮さん（右）とご両親（後方には名峰富士がそびえ立つ）

地域の紹介

今回訪問させていただいた株式会社朝霧高原城田牧場は、富士開拓農業協同組合（丸山富男組合長）に所属しています。㈱朝霧高原城田牧場のある富士宮市は、静岡県東部に位置し、富士氏の発祥・根拠地としても知られています。東方に世界文化遺産である富士山を有し、またその構成資産である富士山本宮浅間大社・山宮浅間神社・村山浅間神社・人穴富士講遺跡・白糸ノ滝といった文化的資産を擁する風光明媚な街です。その富士山の麓で城田さんが牧場を経営されています。

㈱朝霧高原城田牧場の沿革

㈱朝霧高原城田牧場は搾乳牛50頭、育成牛50頭を飼養しており、社長である城田亮（しろたあきら）さんとご両親、インドネシアからの2名の実習生の5名で作業をされています。㈱朝霧高原城田牧場の方針は「完全自家育成」です。初妊牛を導入するより自家育

▲ 牛舎周りにはお花で美観されている

成の方が経営的に安定するという考えで、ご両親の時代からこの方針だそうです。

城田さんは東京農業大学を卒業後、22歳で就農されました。現在40歳で牧場の社長として「高品質の生乳を生産する」ことを常に念頭に置いて、日々努力されています。

その考えの大前提として、①搾乳機器を清潔にする、②牛床を清潔にする、③牛群検定のデータを活用し、高体細胞牛に対して早めの対応を取る、を心掛けているそうです。

▲ 子牛管理も清潔を心掛けている

富士宮市とはいえ、夏は厳しい暑さとなり、体細胞が高くなりつつある牛に対してはビタミン類を十分に給与するなどの対策を取られています。城田さんの「当たり前のことを当たり前に、普通のことを普通にやる」という言葉が印象的でした。

▲ 搾乳機器は清潔に保たれている

1日の作業は、毎朝5時に始まります。牛舎・牛床の掃除、エサ給与、搾乳、飼槽の掃除、エサ給与を行い、その後、育成牛の世話となります。

基本的に哺育はお母さんが担当し、搾乳は実習生（お父さんが監督）が行いますので、城田さんは主に夏場は畑作業、冬場の寒さ対策のためのシート張り等に時間が取れるそうです。

▲ 牛舎内の様子（きれいな環境）

実は数年前まで暑熱対策を行っていなかったそうですが、気候の変化により試行錯誤が始まったそうで、4年前にミストを導入しました。導入当初は効果がありましたが、急激な気温変化で湿度を上げたことで逆効果となりました。そこでミストをやめ、換気扇の数を増やし、さらに屋根への散水を行ったところ、牛の状態がかなり良くなったとのことでした。繁殖の状況も良くなり、乳量は1日・1頭平均33kgとなっています。このように改善への取り組みに対し早期に踏み込めることも城田さんの強みではないかと思います。

経営の概況

城田牧場では14町の圃場にリードカナリーグラスを中心に作付けされており、年に4、5回刈取ります。若干、乾牧草を購入していますが、ほぼ自給粗飼料で賄っています。自給粗飼料を分析し、その分析結果に基づいて、近くのTMRセンターでTMRを製造してもらい、毎日1日分を届けてもらっています。給与する飼料の製造に時間を取られることがないため、畑作業や牛の

観察、問題に対する対応に時間を注げるとのことでした。

日本酪農の将来について

城田さんは「酪農家を少しでも減らしたくない」という思いがあり、牧場を法人化しました。理由として、中学校1年生の娘さんがいますが、牧場を継いでくれるか分からないし、その場合は誰かに経営委譲できるのではとのことです。「娘が結婚して、だんなさんに継いでもらってもいいし、第三者継承でやる気のある方に譲ってもいい。」と城田さんは話されます。まだまだ若い城田さんですが、日本の酪農の将来をきちんと考えていられると感じました。

また、現在はインドネシア人の実習生を雇用していますが、将来は日本人の従業員を雇用し、その中から酪農を始める人が現れればいいともおっしゃっていました。全酪連が事務局を担っている（一社）全酪アカデミーにも大変共感されており、全酪連職員として、あらためて日本の酪農のために力を注がなければいけないと考えさせられました。

▲ カーフハッチにて管理

あとがき

この度は取材を快く引き受けて下さいましたこと、深く御礼申し上げます。取材を通して、日本酪農の将来を見据えた城田さんの考えに感銘を受けました。また、消費者に対し、安心安全な生乳を生産する。そのために牛に対してどのような取り組み・対応を取ればよいのかを常に考えられている城田さんの姿勢は、すべての酪農家さんに共通するものだと思います。

「当たり前のことを当たり前に、普通のことを普通にやる」

言葉としては簡単ですが、これを実践することは大変なことだと思います。それを当たり前のように実行されている城田さんは本当に素晴らしいと思いました。城田さんのご家族のご健勝と、城田牧場のますますのご発展を祈念いたし、今後とも誠心誠意サポートさせていただきます。

▲ ＴＭＲ給与に使用

▲ 自給牧草

総務部発

東京ガス料理教室 たっぷり牛乳レシピで牛乳消費！

年の瀬が近づいてきた12月中旬、たっぷりの牛乳をつかったレシピの料理教室が開かれると聞き、東京都江東区・ガスの科学館のキッチンスタジオで開催された東京ガス料理教室に、おじゃましてきました。

この料理教室は、「炎の調理のおいしさ」を大切にしながら、豊かな食生活を実現するため、大正２年から続いている料理教室です。現在は、環境に優しいエコ・クッキングの推進や、食品ロス削減など、食を通じた社会課題の解決につながる取り組みもされています。

12月から1月の料理教室では、牛乳・乳製品の不需要期に合わせ、牛乳を使ったレシピで開催されています。東京ガスの企画担当者が、秋に新宿で開催した酪青女による理解醸成活動にたまたま立ち寄り、酪農家が厳しい状況にあることを知り『牛乳を消費して酪農家を応援したい』という気持ちになったことで企画されたとのこと。牛乳が余ってしまうこの時期にこそ、牛乳・酪農をとりまく情勢を料理教室の参加者にも知っていただきたい、という思いで、参加者の方へ、全酪連と酪青女で作成した“まずは１杯の牛乳から！”の理解醸成活動パンフレットが配布され、改めて参加者の方々に、牛乳は優れた栄養素をもち、健康に関する総合的な機能性食品であることを伝えることが出来たと共に、「牛乳をたくさん消費することが酪農家さんの応援になります」と呼びかけてくださいました。

参加者の皆様は２時間の中で牛乳パンと米粉のミルクシチューを作り、特にミルククリームの美味しさと米粉を使うことによって手軽に作れたシチューに感動していた様子でした。皆様も、是非冬の定番メニューに取り入れていただき、どんどん牛乳を消費いただければ嬉しいです。

この度、東京ガス料理教室からお話をいただき、業界を越えて牛乳消費に取り組んでいただけることに感謝の気持ちでいっぱいになりました。　（N.U）

▲ 配布したパンフレットをしっかり読んでくださる参加者の皆様

▲ 米粉のミルクシチュー
（米粉は牛乳に入れて溶いてからお鍋に投入）

▲ ミルククリームをたっぷりぬった牛乳パン

▲ 本日の出来上がり
クリスマスツリーと一緒に華やかに仕上がりました

東京ガス 料理教室

➡ https://www.tg-cooking.jp

大阪支所発

西日本酪農青年女性会議「第29回 酪友フォーラム」開催

11月14日㈭、西日本酪農青年女性会議(山下委員長)は、岡山県真庭市蒜山の「蒜山高原休暇村」において第29回酪友フォーラムを総勢75名の参加のもと開催しました。（中四国酪農大学校学生の皆さん22名含む）講演第1部は２つの講演となり公益社団法人中国四国酪農大学校 関哲生氏による「生産・支援・消費の視点に立った担い手育成の取組」と題しまして講演を行いました。中四国酪農大学校は岡山県北西部の蒜山高原にある酪農の専門学校です。大学校は「酪農の将来を担う人材を育て、酪農の発展に資する」というミッションを掲げて取り組んでおられます。2つ目は７月に開催した第51回全国酪農青年女性酪農発表大会 経営発表の部で、中部酪青女の代表として発表され、審査委員長特別賞を受賞された株式会社clover farm 代表取締役 青沼光氏による「酪農で新規就農」と題しまして講演を行いました。青沼氏は「HAPPY DAIRY COWS」を理念に乳牛の幸せを考え、酪農に接しておられます。青沼氏の酪農に対する熱意を感じられた講演でした。講演第2部は西日本酪青女役員、青沼光氏、中国四国酪農大学校学生の皆さんとディスカッションを行いました。ディスカッションで参加頂いた学生の皆さんは実家が牧場を経営されており、将来のビジョンもしっかり考えられた意見を述べておられとても頼もしいと感じました。　（A.O）

一般社団法人 全国酪農協会の 酪農共済制度のご紹介

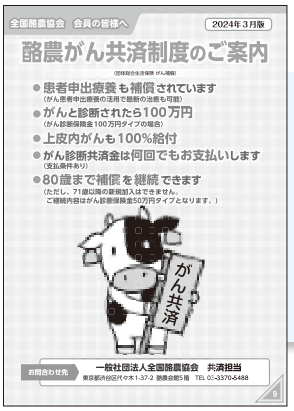
第3回 酪農がん共済

第３回目は、「がん」のリスクに備える「酪農がん共済」についてご紹介いたします。日本人の場合、２人に１人の方が「がん」に罹るといわれています（女性 46%、男性 62%）。

がんは、以前と比べて治る病気になりつつありますが、他の疾病と比べると、「治療に時間がかかる」・「治療にお金がかかる」のが現実です。がんに備えて、上乗せの補償が必要です。

酪農がん共済の５つの特徴

1. がんと診断されたら 100万円（100 万円タイプの場合）
2. がん診断共済金は何回でもお支払いします（支払条件あり）
3. 上皮内がんも 100%給付します
4. がん患者申出療養も補償されています
5. 80 歳まで補償を継続できます



パンフレットは
ＱＲコードからご覧いただけます。

➡ http://www.rakunou.org/kyosai/pdf/gan_kyosai.pdf

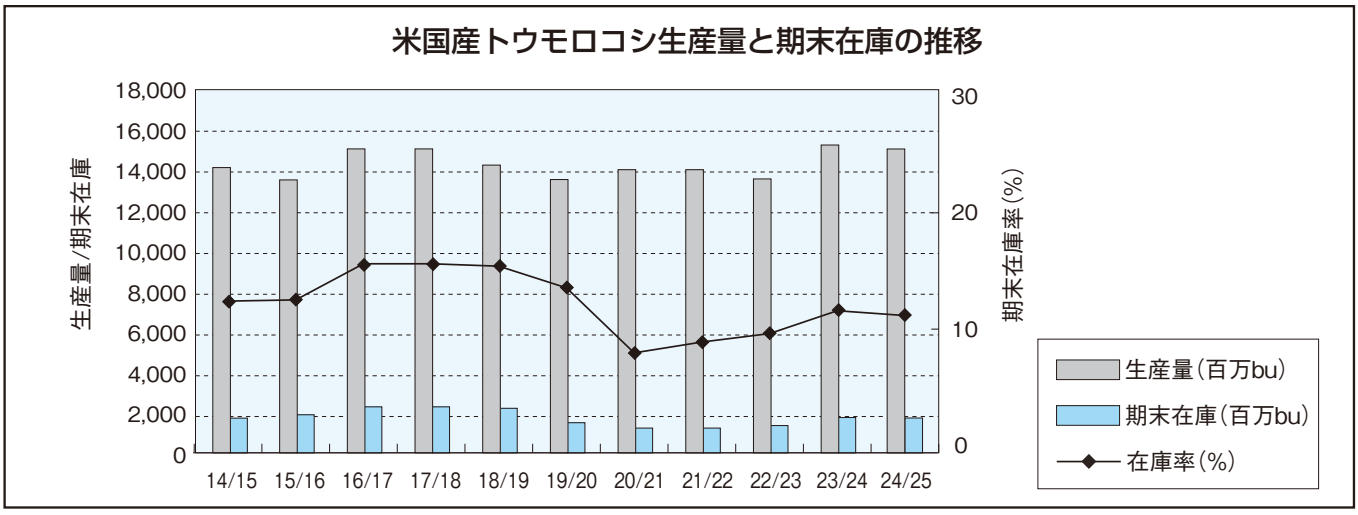
酪農共済制度は、他の保険・共済とは異なり、酪農家・酪農協職員等向の制度であり、一般の方は加入することはできません。

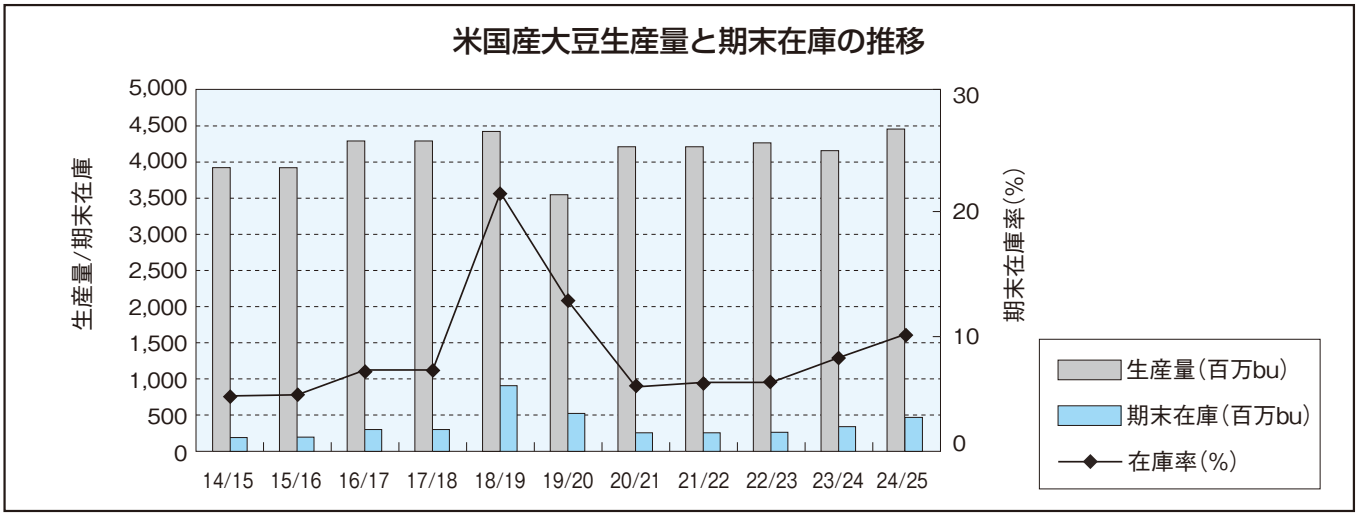
酪農共済制度に関する問い合わせ、各制度のパンフレットご希望の際は、下記までお問い合わせください。

一般社団法人 全国酪農協会
電話 03（3370）5488　www.rakunou.org

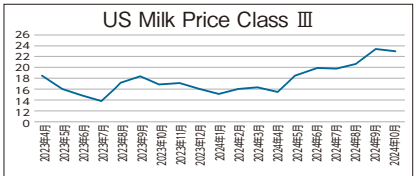
原料情勢　令和6年12月

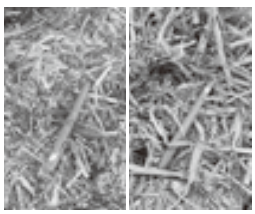
		23/24年産	24/25年産
12月10日発表 米国農務省 トウモロコシ 需給予想	作付面積（百万エーカー）	94.6	90.7
	単　　収（ブッシェル/エーカー）	177.3	183.1
	生 産 量（ブッシェル）	153億4,100万	151億4,300万
	需 要 量（ブッシェル）	149億6,900万	151億9,000万
	期末在庫（ブッシェル）	17億6,000万	17億3,800万
	在 庫 率	11.76%	11.44%
トウモロコシ 相場動向	南米のトウモロコシ内需増加の影響から、南米からの輸出数量が減少しており、米国に需要が集中する状況となっている。このため今回の需給報告では、米国の輸出数量が大幅に引き上げられており、予想以上に期末在庫が減少したことから、シカゴ定期は大きく値を上げている。		
大豆粕相場動向	シカゴ定期は米国・南米の豊作を背景に弱含んで推移している。米中貿易摩擦の懸念から中国の輸入数量が減少する可能性も出てきておりシカゴ定期は上値が重い展開が予想されるが、中国での産地価格の上昇により輸入価格は高くなっている。		
糟糠類	【一般フスマ】　夏場の猛暑による引き取り数量の減少から、ふすま在庫は若干重めとなっている。12月以降は適正レベルに戻る見込みであったが引き続き在庫は重い状況となっている。		
	【グルテンフィード】　主製品の不需要期から、グルテンフィードの発生量は減少している一方で、飼料需要は強いことから需給が逼迫している。北海道などの遠隔地には不足分を中国産で補っている。		
海上運賃	海上運賃は現状特に需要があるわけでもないため、年内は軟調に推移する可能性が高い。今後の見通しは不透明であり注視する必要がある。		





輸入粗飼料の情勢　令和6年 12 月

北米コンテナ船情勢	北米西海岸航路は乗継航路を含めて主要な本船スケジュールの乱れが続いています。米国では11月末のサンクスギビングデー（感謝祭）から年末において、港湾労働者の休暇が増加し、一部の港では荷役作業が鈍化する恐れがあり、港湾が混雑することが懸念されています。また、米国大統領就任に伴い、中国を始めとする海外からの貨物へ高額の関税措置を適用することも予想されているため、駆け込み需要も増加しています。カナダでは西岸港湾労組（ILWU Local 514）とブリティッシュコロンビア海事雇用協会（BC Maritime Employers Association）の労使交渉が難航し、ストライキが決行されましたが、労働基準監督機関のカナダ労使関係委員会（CIRB）による仲裁裁定（CIRBが協定をまとめるまで既存協定が延長となる）が実施されたことで、バンクーバー港の稼働は11月14日より再開されています。
ビートパルプ	【米国産】　主産地のミシガン州では11月頃まで温暖な気候が続いていましたが、現在、気温も低下しており保管状況は良好です。一方で、寒波による嵐や悪天候で作業や物流が不安定になる恐れがあるため、動向には注視が必要です。
アルファルファ	【ワシントン州】　主産地であるワシントン州コロンビアベースンでは、24年産の収穫作業が終了しています。24年産を振り返ると、１番刈は春先の生育に適した冷涼な気候や好天に恵まれたことにより、色目が良好で成分が高い上級品が多く収穫されました。２番刈については１番刈同様、好天に恵まれたことにより色目が良好な上級品の発生が中心となりました。３番刈については夏部の気温上昇や、北西部近辺の山火事による煙の影響で乾燥に時間が掛かったため、一部では色褪せた過乾燥気味の品質が発生しましたが、４番刈では煙の影響がなく良品が多く収穫されました。産地相場については、輸出向け需要の停滞により、引き続き低迷しています。
	【オレゴン州】　主産地であるオレゴン州クラマスフォールズでは24年産の収穫作業が終了しています。24年産全体を通して好天に恵まれ、収穫作業も順調に進んだことで、多くの圃場で４番刈まで生産されました。24年産を振り返ると一部の圃場で収穫作業中に降雨被害もありましたが、春先の冷涼な気候により１番刈は葉付が良好な成分が高い品質の発生が中心となりました。２番刈については、７月中下旬に気温が上昇したため、１番刈と比較すると成分は低下したものの、収穫時期を通して天候に恵まれたこともあり上級品が中心となりました。３番刈では高温が続いた中での収穫により一部の圃場で中級品の発生もありましたが、概ね上級品の発生が中心となりました。産地相場については引き続き、米国酪農家は近隣州含めて成分値が高い品質を買付していますが、荷動きは低調に推移しています。同州中部クリスマスバレーでも24年産の生産を終えています。１番刈の収穫時期は例年よりも遅かったものの、収穫期の天候が安定していたことで降雨被害はなく上級品が多く発生しました。２番刈では山火事による煙の影響で圃場での乾燥に時間がかかったことから過乾燥な品質のものや、色褪せが多い品質も発生しましたが、３番刈では山火事の影響も無くなり、良品の発生が中心となっています。
	【カリフォルニア州】　カリフォルニア州南部のインペリアルバレーでは、DIP（休耕地政策）に参加していない圃場で収穫作業が続いています。現在までの作況を振り返ると、１番刈については春先の降雨で収穫作業が遅れたことにより、刈取り適期を逃した圃場が多く、中級品の発生が中心となりました。そのため、例年、高成分品質を求める中国や中東からの引き合いも弱く、春先は米国乳価も低迷していたことも相まって需要は停滞しました。以降の刈取りについては、気温や湿度の上昇に伴い、成分値が下がり始めたことで、茎が細い過乾燥なサマーヘイの発生が中心となりました。灌漑局の発表によると、11月15日時点でのアルファルファの作付面積は149,964エーカー（前年同期は145,411エーカー）で前年同期比103%と増加しています。  出典:USDA　全米平均クラスⅢ乳価　単位:米国ドル/１００ポンド
チモシー	【米国産】　主産地であるワシントン州コロンビアベースンおよびエレンズバーグでは24年産の収穫作業が終了しています。春先の冷涼な気候や、各産地での降雨被害はわずかということもあり、収穫された１番刈の多くは上級品で中～低級品の発生は限定的となりました。２番刈の品質は降雨や山火事の煙の影響で、上級品の発生は限定的となりました。当初は１番刈終了後に多くの圃場が他作物へ転作すると予想されていましたが、他作物の相場も低水準であったことから、転作せずにそのまま２番刈のチモシー収穫に進んだ圃場が多く、24年産の総生産量は昨年並となりました。
	【カナダ産】　主産地であるアルバータ州南部レスブリッジ地区、中部クレモナ地区ともに24年産の収穫作業が終了しています。南部レスブリッジ地区１番刈の品質は収穫期の天候に恵まれたことから上～中級品が中心で、低級品の発生は限定的となりました。同州中部のクレモナ地区１番刈の品質は、収穫までに乾燥した日が多かったものの生育期間中の降雨や高湿度な気候もあったことから、中級品の発生が中心となりました。競合作物の相場も低迷していることから、25年産の作付面積は現時点で例年並と予想されています。
スーダングラス	主産地であるカリフォルニア州南部インペリアルバレーでは、24年産の収穫作業が終了しています。生産農家は23年産の価格軟化に加え、日本からの需要も減少したため、24年産の作付意欲が低下し、作付面積は大幅な減少となりました。作付面積は減少したものの、好天に恵まれたことで、収穫された１番刈は上～中級品の発生が中心となりました。２番刈については産地相場低迷もあり、生産を行わず圃場にすき込む生産者も多くいたため、夏場に多く発生する茎が太い低級品の発生は限定的となりました。23年産の在庫に加え、未だに22年産の旧穀在庫を抱えている輸出業者もいるため作付面積の減少による供給力に懸念はありませんが、今後の相場次第では今期の生産量と繰り越し在庫より需要が上回ることも考えられるため注視が必要です。スーダングラスはDIPの対象ではないことや、産地相場の回復目途が立っていないことから、25年産の作付面積も24年産並～減少すると予想されています。灌漑局の発表によると、11月15日時点の作付面積は1,233エーカー（前年同期は1,399エーカー）となっており、前年同期比88%となっています。
クレイングラス	**クレインは全酪連の登録商標です。** 主産地であるカリフォルニア州南部インペリアルバレーでは、24年産の収穫作業が終了しています。24年産はDIP実施により夏場の生産は減少し、湿度や気温が高い日があったことから茎が固めで色褪せた品質も発生しましたが、年間を通して良品が多く収穫されました。25年産でも継続してDIPが実施される見込みのため、夏場の生産は減少すると予想されていますが、作付面積は例年並と予想されています。灌漑局の発表によると、11月15日時点の作付面積は22,834エーカー（前年同期21,609エーカー）となっており、前年同期比106%と増加しています。
バミューダ	主産地であるカリフォルニア州インペリアルバレーでは24年産の収穫作業が終了しています。灌漑局の発表によると、11月15日時点の作付面積は78,087エーカー（前年同期：69,727エーカー）前年比112%と増加しています。年間を通して、米国内の馬糧向け需要や種子の相場も堅調に推移したことで、昨年を上回る作付面積となりました。
オーツヘイ	【西豪州産】　西豪州の収穫作業は終了しています。生育期間中の降雨に恵まれたことにより、収量は昨年と比較し増加しました。一部の圃場では、乾燥に時間を要したため色褪せたような品質も発生していますが、主に中級品が中心に収穫されています。
	【南豪州産】　南豪州の収穫作業は終了しています。生育期間中の降雨が少なく、乾燥した気候が続いたことで収量は大幅に減少しています。また、降雨不足により枯れたような茶葉や雑草の混入も多いことから、見た目が良くない品質も一部で収穫されています。
	【東豪州産】　東豪州の収穫作業は終了しています。生育期間中の降雨が少なく、乾燥した気候が続いたことで収量は平年並～以下と地域によって異なっています。一部の地域では、降雨被害もありましたが、例年発生するような低級品は限定的で、収穫された品質は上～中級品が中心となっています。



▲ 左:24年産オーツヘイ上級品:東豪州
右:24年産オーツヘイ低級品:西豪州
（11月下旬:西豪州にて撮影）

＼(一社)全酪アカデミーも参加しています／

新・農業人フェア

主催：株式会社農協観光　運営：株式会社マイナビ　協賛：全国酪農業協同組合連合会　他

例年農林水産省補助事業として開催されている「新・農業人フェア」は、就農希望者と就農希望者を募集する自治体や農業法人等が一堂に会し、就農相談やセミナー、説明会を行う就農相談会です。

「農業を知りたい」「働きたい」「かかわってみたい」という気持ちをもつ全ての方を対象とした、入場無料、入退場も自由な、国内最大級の就農イベントです。

イベントの詳細はこちら 〉

開催日	種　別	会　場
7月20日㈯（終了しました）	農業就職・転職 LIVE	東銀座歌舞伎座タワー マイナビ PLACE（東京都中央区銀座）
8月31日㈯（終了しました）	農業 EXPO	東京国際フォーラム（東京都千代田区丸の内）
10月27日㈰（終了しました）	農業 EXPO・LIVE	グランキューブ大阪（大阪府大阪市北区中之島）
12月 8日㈰（終了しました）	農業 EXPO	東京ビッグサイト（東京都江東区有明）
2月1日㈯	**農業就農・転職 LIVE**	**東京交通会館（東京都千代田区有楽町）**

酪農青年女性会議 LINE公式アカウント

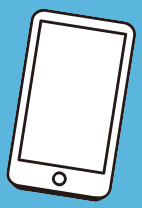
友達募集中

友達追加方法

1. ホーム画面へ
2. 友だち追加ボタンをタップ
3. 「QRコード」から読み取る
4. 友だち追加で完了

@642bpcwk

最新情報をお届けします。



QRコードで追加
もしくは
ID：@642bpcwk
で検索！

INFORMATION

北海道 乳牛産地情報

令和７年１月１日現在

札幌支所	TEL 011-241-0765
釧路事務所	TEL 0154-52-1232
根室駐在員事務所	TEL 01537-6-1877
帯広事務所	TEL 0155-37-6051
道北事務所	TEL 01654-2-2368

価格状況 ↑……強含み ↗……やや強含み →……横這い ↘……やや弱含み ↓……弱含み

事務所	畜種	相場(万円)	価格状況	管内状況
札幌管内	育成牛(10-12月令)	28～38	↗	札幌管内の12月中旬までの生乳生産量前年比は、函館管内月計で104.8%、累計で100.0%、苫小牧管内月計で101.7%、累計で98.6%の実績となっております。１月の初妊牛動向といたしまして、貴重な春分娩となる３月～４月中旬までの分娩が中心の取引となることから、庭先購買価格は強含みで推移すると見込まれます。腹別の資源状況としましては、雌雄選別腹、F1腹ともに出回りはあり、両者の価格差は縮まっています。当管内は高能力牛の出回りが多い地域になります。高能力・高成績の牛を紹介してまいりますのでご興味のある牛がございましたら、お問い合わせのほどよろしくお願いいたします。
	初妊牛	55～65	↑	
	経産牛	40～50	→	
釧路管内	育成牛(10-12月令)	27～37	↗	根釧管内の12月中旬までの生乳生産量前年比は、釧路管内月計で103.3%、累計で101.2%、中標津管内月計で101.2%、累計で101.5%の実績となっております。１月の初妊牛動向といたしまして、３月～４月中旬の分娩中心となります。春分娩の需要が見込まれることから、相場は強含みに推移すると予想されます。すでに、春産み相場が値上がりすることを見越した動きもあり、前年より２ヶ月ほど前倒しで相場が上昇傾向にあります。腹別では雌雄選別腹とF1腹の価格差が縮まり、和牛受精卵移植腹と併せて堅調に推移するものと思われます。育成牛につきまして３～６月産まれの牛も引き合いが強くなっており、やや強含みで推移するものと見込まれます。
	初妊牛	55～65	↑	
	経産牛	40～50	→	
帯広管内	育成牛(10-12月令)	28～38	↗	帯広管内の12月中旬までの生乳生産量前年比は、帯広管内月計で103.3%、累計で101.2%の実績となっております。１月の初妊牛動向といたしまして、３月～４月中旬の分娩中心となりますが、道内外の需要増加に重ねて、貴重な春分娩が主流の出回りとなることからも、相場は上げ基調になると見込まれます。出回り資源については、雌雄選別腹、F1腹ともに確保できる状況となりますが、資源の流れは速いかと思われます。育成牛については、道内で春産まれの育成牛の需要が高まっており、中クラス以上の牛に関しては既に30万円を超える取引も出始めておりますので堅調に推移するものと考えられます。経産牛については、以前からの即戦力としての引き合いは継続して見込まれることから横這いで推移すると予想されます。
	初妊牛	55～65	↑	
	経産牛	40～50	→	
道北管内	育成牛(10-12月令)	28～38	↗	道北管内の12月中旬までの生乳生産量前年比は、稚内管内月計で98.4%、累計で98.3%、北見管内月計で102.7%、累計で102.0%の実績となっております。１月の初妊牛動向といたしまして、３月下旬～４月中旬分娩が中心となります。春分娩中心に出回る事から、都府県からの引き合いが強くなるものと思われ、値動きは強含みに推移すると見込まれます。腹別の資源状況については、今年の夏場の気候がそこまで暑くならなかったこともあり、雌雄選別腹、F1腹ともに販売向けの資源は確保できる状況にあります。経産牛については、道内酪農家が即戦力を求める動きがあり、分娩の近い経産牛の価格は強含みで推移するものと見込まれます。
	初妊牛	53～63	↑	
	経産牛	35～45	↑	
道内総括	育成牛(10-12月令)	28～38	↗	新年あけましておめでとうございます。本年も都府県への搾乳用素牛供給につきまして、札幌支所職員一丸となり取り組んでまいりますのでどうぞ、よろしくお願いいたします。道内の12月中旬までの生乳生産量前年比は102.1%、累計で100.8%の実績となっております。１月の初妊牛動向といたしまして、需要の高い3月下旬～4月中旬分娩である春分娩が中心となり強含みで見込んでおります。出回り資源については、雌雄選別腹、F1腹ともに確保が出来る状況となっておりますが、荷動きは早くなってきております。また、12月から雌雄選別腹の需要が高まってきており、F1腹との価格差もなくなってきております。今後とも相場動向に注視しながら、庭先選畜購買による優良な搾乳素牛を供給して参りますので、購買計画がございましたらお早目に弊会担当者までご連絡いただきますよう、よろしくお願いいたします。
	初妊牛	55～65	↑	
	経産牛	40～50	→	

今月の表紙

今月の表紙は「第14回酪農いきいきフォトコンテスト」に応募いただいた作品「NOTO未来へ」（石川県 西出穣氏 撮影）です。

令和７年1月10日発行（毎月1回10日発行）
全酪連会報 1月号 No.712
●編集・発行人 津田知亮
●発行 全国酪農業協同組合連合会
〒151-0053 東京都渋谷区代々木一丁目37番２号 酪農会館
TEL 03-5931-8003 https://www.zenrakuren.or.jp/

編集後記

●あけましておめでとうございます。
皆様には、晴れやかに新春を迎えられたことと、お慶び申し上げます。
巳年は、ヘビが脱皮することから「復活と再生」を意味するため、新しいことが始まる１年と言われています。
牛乳・乳製品の需要が復活し、酪農業界の厳しい情勢が再生することを願わずにはいられません。
全酪連会報も、皆様にご愛読いただける内容でお届けできるよう今年も努めてまいります。
本年もよろしくお願いいたします。
●会報に関するご意見・ご要望等があれば、以下のアドレスにメールをいただければ幸いです。
shidoukikaku@zenrakuren.or.jp

今月のらくのうこどもギャラリー 入賞作品紹介

きゅうしょくをたべてるよ
西尾市立室場保育園 5歳（中部）　石川 幹大

今月の入賞作品は…
西尾市立室場保育園 5歳 （中部）の石川 幹大さんの作品です。
迷いの無い線で大らかに伸び伸びと描いています。つぶらな瞳が可愛く描けましたね。背景の空色にピンクの鼻と口からはみ出た草の緑など色彩が柔らかで、ゆったりとした時間の流れを感じる、ほのぼのとした作品になりました。

※この作品は本会と全国酪農青年女性会議共催の「第50回らくのうこどもギャラリー」で全国255点の応募作品から入賞12点に選ばれたものです。

主催　全国酪農青年女性会議